

連載もいよいよ最終回となりました。

これまで広島乳幼児サークルの仲間で連載を担当してきました。このサークルが結成される前から「ひろしまの療育」の歴史は始まっています。療育センターができる50年を迎えて、今年度末には6年間にもわたって建て替え工事が完了し、広島市の中核拠点となる広島市こども療育センターの機能がさらに充実できると期待しています。

歴史を知り、次世代に伝えていく

この連載を通して私たちが学びたかったことは、二つあります。

一つ目は療育の歴史を知り、自分たちの言葉で伝えていけるようにということです。制度を充実させるため、保護者とともに運動を起こし、人を増やし、北部、西部の療育センターをつくるなど障害児福祉の施策を提案、企画してきました。しかし一定の制度が整いつつある頃、応益負担や契約制度により、ともにつくる関係から利用者にサービスを提供する関係になり、職員と子どもとその家族が分断されていく現実がありました。

毎日通園や親子療育が保障され、子どもを真ん中に積み重ねていく療育の形は絶対に守りたい。そのためには、子どもたちが幼稚園や保育園に通うのと同じよう毎日通う場所

仲間がいっぱい ひろしまの療育

この連載では、全障研広島県支部広島乳幼児サークルのメンバーが、乳幼児期の療育で大切にしてきたこと、保護者とともに運動してきたことなど、ひろしまの療育についてお伝えします。



最終回 仲間がいっぱい ひろしまの療育

広島市こども療育センター 伊津佳恵

があり、自己実現していく環境を整えることが不可欠です。そして、保護者に家庭で子育てに向き合わせることでもなく、親のレスポンスだけではなく、仲間や専門職のスタッフとともに、安心して育つていくんだという土台がつくられ、子育ての喜びを感じていての親子療育があります。幼児期の子育てをしている保護者が望むのなら親子療育を選択できるよう、生活や親のキャリアが守られるべきだと考えます。そのためには、親子療育の間の生活保障や親子療育休暇のような、わが子と向き合える時間を過ごすことが制度として保障されなければいけません。

クラス目標の中に「小さい目と大きい目をもつ」という言葉があります。目の前の子どもの成長とともに集団、地域、社会へと系をつくる大きな視点は、その子にこの時間この支援をすればいいという狭い見解ではないのです。社会を変えていきながら、本当の親のねがいに発達保障の道筋を照らし合わせ、「自分たちに恩恵はなくとも後の世代の親子がそこで救われるのなら」と運動をつくった保護者集団とともに学び合うのは職員集団です。「制度でしか子どもたちは守れない」とこれからも仲間とともに学び続けていくこと、一歩ずつでも前に進んでいきたいです。



広島乳幼児サークル結成後参加した全障研全国大会
第47回 青森 2013

発達保障のとりくみを深める

二つ目は、発達保障の実践です。職場では、子どもの育ちをとらえ、一人ひとりの発達支援計画をもとに集団療育を行なっています。日々の業務はたくさんあり、実践を通して子どもの悩みをとらえるための検討をする時間がつくりにくくなっています。働き方改革の時代ですし、子育て、介護、家庭もバランスよく両立して働くことが大事です。限られた時間の中で発達保障を学び、自分で言語化し、互いに議論する時間も工夫していくかなければなりません。議論するから子どもとのとらえ方・見方が共通にもて、支援につながるのではないかでしょう。しかし悩みは尽きません。現にサークル内で年間2本計画していた実践検討会もここ最近はなかなか発表者の手が挙がりません。

私自身、若い頃は子どもと何をすればよいか、どうあそびを組み立ててよいかわからず、子どもたちにも振り回され、どうしたら仲良くなれるのだろうかと迷うばかりでした。先輩職員の言動、行動を見ながらまねていく日々でした。子どもの好きなことを知り、子どもの心の中に入っていき、充分に関係づくりができる時間や体制を保障してもらった経験もあります。無表情に思えていたそ

の子の笑い顔がはつきりとわかつた時にはうれしくて、全神経を集中させてあそびまくりました。その子の喜びや苦しみが見えた時、愛おしさが爆発しました。その経験は今でも心に焼き付いています。

それから経験を重ねても、実践の悩みはすぐアドバイスがもらえるサークルに報告するようになりました。つたない実践をさらけ出す恥ずかしさよりも、この子のためにどうにかしたいという思いが勝り、助言を得ることができます。そこができる大事な場でした。自分なりの考え方やとりくみに足りないところをサークルの仲間は決して否定せず、その子の声を代弁し、発達的視点からこういうとりくみが必要なのではないかと議論し、多面的に意見や思いを届けてくれます。それらを受け、本当に震みが晴れたような気持ちになり、子どもに会うのが楽しみになっていました。何もできなかつた私を、本当に見捨てられることなく職員集団の中で根気強く育ててもらつたなど、感謝の気持ちでいっぱいです。

毎日通園に通う子どもたちはゆっくりと変化していきます。しかしその分、葛藤や悩みも大きい。その姿を否定せず、子どものねがいを掴めた時、そのねがいに共感しながら家族と応援していくことができました。